

## 東草野の山村景観

## 石臼生産遺跡3

## — 曲谷石工の作品 —

鎌倉時代終わりごろに石材加工が始まり、江戸時代に盛んに石臼を生産した曲谷石工ですが、石臼のみを製作していたのではありません。曲谷石工の製品は、市内をはじめ各地に残る江戸時代の石造物の銘文からもうかがえます。秋葉神社(春照)の石の祠には、「石工江州曲谷村木曾政衛門義致」が寛政11年(1799)に製作したことが記されています。この石材は明らかに曲谷石ではなく、出張して製作にあたったようです。

市内で確認されている最も古い例は、太平神社(太平寺)の石灯籠で天明7年(1787)作で「當國浅井郡曲谷村／木曾政右衛門／大連義致／同村文右衛門／致永」の銘があります。観音寺(朝日)惣門前の一対の石灯籠は、「観世音」の各一文字にお米一升が入るといわれる大きな石灯籠です。「文政七甲申年(1824)九月」「石工／當圀曲谷村住人／木曾政五良大夫／大連義周／同増五郎太夫／義金」と刻まれています。八幡神社(春照)には「文政八乙酉天／仲冬吉祥日」「石工／當國曲谷村／木曾政五郎／同増五郎」と刻む石灯籠があります。石工名はありませんが、伊夫岐神社(伊吹)の石灯籠も曲谷石工の作品とされています。これらの石材は、いずれも、姉川沿いで産出する青っぽい石材の「小泉石」「梨目石」と呼ばれるものです。伊吹山登山口(上野)の金比羅灯籠は木曾義周・義金の制作で花崗岩製です。このように曲谷の石工が残した作品は曲谷以外の伊吹山麓の主要な石造物に残されていて、江戸時代における彼らの活発な活動をうかがうことができます。

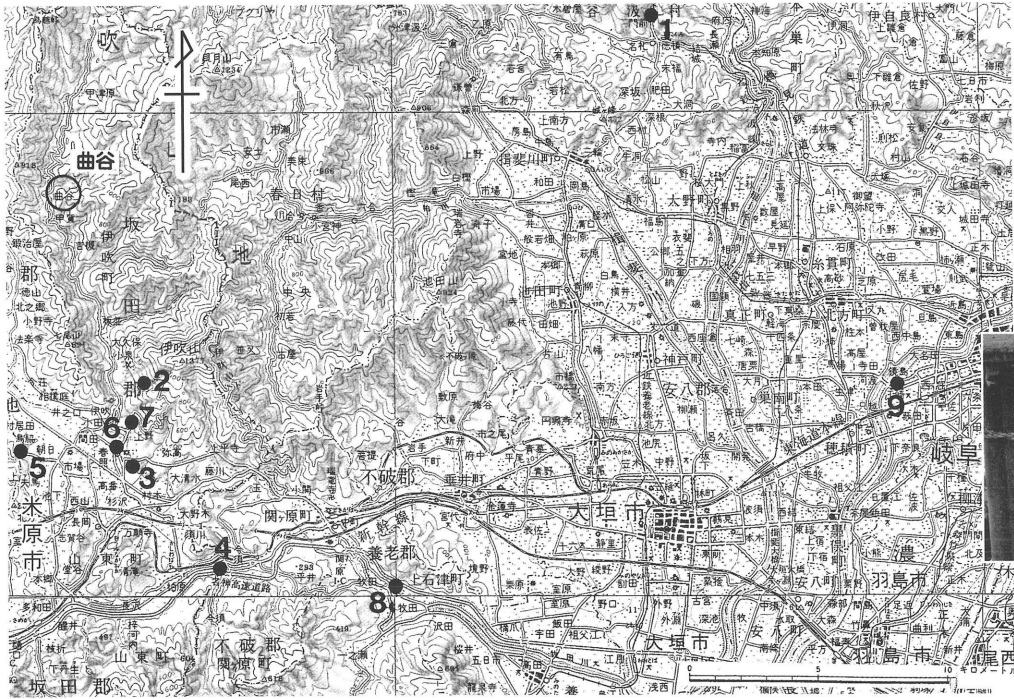


九里半街道金比羅灯籠(大垣市・8)

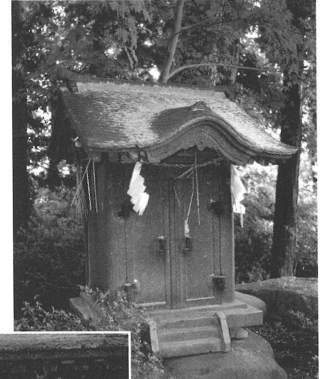
妙応寺手水鉢(関ヶ原町・4)



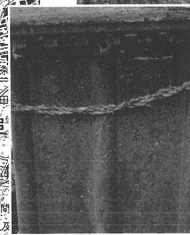
岐阜県揖斐川町の谷汲山華嚴寺本堂前の笠塔婆には「石工頭江州浅井郡曲谷村木曾(以下不明)」の銘があり、延享2年(1745)作と推定される曲谷石工の作品では最古のものです。岐阜県には関ヶ原町妙応寺の手水鉢(致永作/1799年)や大垣市上石津町の九里半街道金毘羅灯籠(義金作/1841年)など、意匠の優れた作品もあります。岐阜市乙津寺(9)には「石工佐吉/江州上浅井郡曲谷村/石工傳吉/同國同郡同村/石工松右工門」と刻まれた江戸時代末期の四国八十八カ所石仏があります。さらに、栗東市縹の大宝神社の鳥居も曲谷石工により製作された記録があります。曲谷は石臼の産地だったばかりではなく、優秀な石工を輩出する土地でもありました。(田井中洋介「近江の近世石工と石造遺品—浅井郡曲谷村の石工を中心に—」『近江の文化と伝統』2010)



曲谷石工作品位置図(伊吹町・山東町は現米原市、春日村・谷汲村は現揖斐川町、上石津町は現大垣市)



秋葉神社石祠  
(春照・3)



銘文



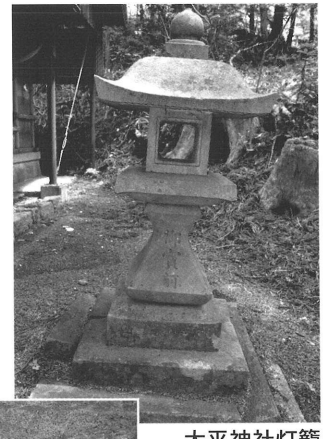
登山口金毘羅灯籠  
(上野・7)



八幡神社灯籠  
(春照・6)



観音寺灯籠  
(朝日・5)

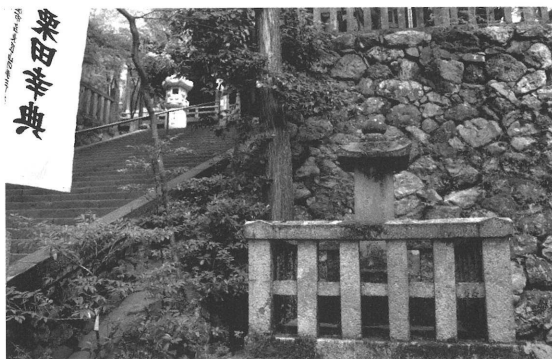


太平神社灯籠  
(太平寺・2)



銘文

これまで確認されている作品から、木曾を名乗る義致一致永・義周一義金の石工の系統が読み取れます。さらに、曲谷石工が木曾姓を名乗っていることは、曲谷に石材加工を伝えた西仏房が木曾義仲の家臣であったことにちなむと考えられ、この伝承が江戸時代後期に遡ることを示すとともに、石工の自己認識がうかがえます。



華嚴寺の笠塔婆(揖斐川町・1)

### 石臼生産遺跡3 —曲谷石工の作品—

■ 所在地 滋賀県米原市長岡1050-1 TEL.0749-55-4552  
岐阜県関ヶ原・揖斐川町・大垣市

### 米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1 TEL.0749-55-4552

平成25年度 埋蔵文化財活用事業